

## 博士論文執筆経験談

平成27年3月修了生

元所属：自然系教育講座 現所属：東京学芸大学附属国際中等教育学校 教諭 **小林 廉**

### はじめに

私は博士課程修了に5年を要した身です。以下では、院生当時の状況、5年を要した理由を簡単に述べ、学位論文執筆について今思うことを何点か挙げたいと思います。少しでも参考になれば幸いです。

### 院生当時の状況

私は現職教員3年目の立場で入学しました。教員の立場は忙しいものでした。当時、研究のことを考えられるのはどんなに早くても平日19時ぐらいからだったと思います。学位論文を執筆した5年目は、普段の授業や仕事に加え、担任していた高3生の多彩な進路の希望に応えながらでしたので、我ながらよく書けたと思いますが、提出前の記憶はほとんどありません。

### 5年間を要した理由

なぜ5年かかったのかを振り返っておきたいと思います。なお、5年かかったことに後悔はありません。第1に、研究の核となるデータを収集できた時期がD2の終わりより遅かったことがあります。もちろん収集しながら分析を進めていましたし、そのときは間に合わせるつもりでしたが、無理でした。というのも、第2に、データが非常に豊富（「宝の山」）で、ようやく分析らしい分析ができるまでにかなりの時間を要したからです。なんとなく掴んだ感覚が生まれたのはちょうどD5になろうとしていたときでした。修士のときから参考にしてきた理論を実は解釈しきれていなかったというのも大きく影響しました（ただ、新たな論文を読む時間はなかなかありませんでした）。また、この期間は、自分が博士課程の院生でありながら研究方法論の勉強が足りていないことを痛感しました。

### 学位論文執筆について今思うこと

#### (1) 学位論文を壮大にとらえすぎないこと

数学教育学の先生方が書かれた学位論文は実に壮大かつ濃厚で、私も同じレベルにいけないまでもなるべく近いものを—しかし書けるはずがない—と考えていた時期がありました。しかし、院生当時にお聞きしたこの執筆談で、学位論文を研究のスタートととらえ、壮大にとらえすぎないといった旨のお話をお聞きして、少し気持ちが楽になりました。実際、私も、学位

をとったこれからこそが勝負であると思っています。

#### (2) アカデミックな環境や時間を確保すること

現職教員として日々忙しく過ごしていると、つい「こなす」思考ばかりになってしまったり、現行の教育制度などをいつのまにか前提にしてしまったりしていました。そういった思考とは異なる、アカデミックに考えることのできる環境や時間が必要不可欠です。私の場合、毎週定期的に大学に通ってゼミに出席する機会が貴重でした。また、学校の仕事と完全に切り離して研究の思考になる時間の捻出に努めました。そのために途中から朝型に切り替えました。「つい自分が前提にしてしまっていることを疑う」という視点は、いまでも研究やそれ以外で強く意識しています。

#### (3) 自分の考えの表出を続けること

学会発表等に限らず、普段のゼミでもそうです。つい忙しく流れていってしまいそうな日々、ゼミでの発表という強制力があるのはありがたいことでした。そうした場で自分の考えたことに対して確かな立場から指導いただけることに心から感謝しつつ、一方で自分の不甲斐なさに落胆しながら、このまま続けても変わらないのではないかと思うこともありました。しかし今思えば、自分の考えを出し続けたからこそD5になってつかめてきたことがあったのだと思います。

#### (4) 研究の原点に常に戻ること

言うまでもないことだと思いますが、つい目先のことにとらわれがちになってしまう時があるかもしれません。そういうときこそ、ここの「学校教育学研究科」に入って少しでも解決したかったはずの元々の問題に何度も戻り、自分の思いを確かめました。

### 終わりに

私は自分の学位論文に決して満足していませんし、当時は6年目も考えていました。しかし、ある程度の時点でまとめることによって見えてくることがありますし、修了することで広がる可能性があるように思えます。元々の問題意識を大切に、目的は高く持ち、小さくまとまらない、ということと相反するようですが、研究はこれから一生続くものです。教科教育学の立場が不安定になりつつある今だからこそ、同じ「広域科学としての教科教育学」を研究する同志の皆様を心より応援しております。